# ため池みらいプロジェクト

柴崎浩平（環境デザイン系）

**キーワード**：農村，ため池，草刈り，里山，山採り

## 1. はじめに

本プロジェクトでは,ため池のある暮らしのみらいを創造していくことを目的とし,水や緑に関する資源（ため池や里山，農業・農地，それらを管理する人材など）の管理・活用に向けた地域連携のあり方を探求している。連携先としては，著者が代表理事を務める「(一社）ため池みらい研究所」ならびに同研究所に関わるプレイヤーとなる[注1)]。

活動内容として大きくは，「研究・実践活動」と「交流活動」をおこなっている。「研究・実践活動」としては，「暮らしとつながる里山づくり」と「草刈りグループの創造」がある。「交流活動」としては，フィールドに赴き，地域のイベントへの参加やフィールドワーク，学内の交流活動などがある。以下，順番に説明を加えていく。

なお，2022 年度のプロジェクトメンバーは 1 回生 8 名であり，基本的には毎週木曜日に打ち合わせをおこない，活動を進めてきた。

## 2. 研究・実践活動

### 2.1 暮らしとつながる里山づくり

#### 2.1.1 背景と目的

かつて里山は農村でのライフスタイルに欠かせないものであった。しかし今日の暮らしにおいて，里山は必要でなくなりつつあり,その結果として多くの里山は荒廃している。そこで，里山資源を現代のライフスタイルにあった形で活用し,里山の荒廃を防ぐ取り組みを展開している。具体的には，里山に自生している樹木・幼木・下草を山採りし，庭などの植栽として活用する仕組みづくりをおこなっている。連携先は，リビングソイル研究所（代表 西山氏）である。西山氏は，土の専門家であり，自生種を生かした植栽空間づくりをおこなう人物である。実践フィールドは加古川市志方町広尾東の里山となる。

#### 2.1.2 活動の内容と今後の課題

主な活動としては，里山での樹木・幼木・下草の山採りや，種・下草の採取・育苗，山採り植物を活用したワークショップの開催,山採り植物を植栽した優良事例（cafe）の視察および庭づくりに向けた計画策定などをおこなった。

**写真 1** 山採りおよび山採り植物の活用事例の見学

本プロジェクトの大きな課題は,山採りミュニティの創造にある。里山には様々な植物が自生していうるが，全ての植物が山採り・植栽に適している訳ではない。活着のしづらさや販売価格は樹種によって様々である。また，同じ樹種によっても，大きさや形で販売価格も異なる。そのため，山採りに適した植物を見分け，その掘り出し方・活着のさせ方に関する知識・技術を習得する必要がある。今後は，学生だけでも山採りができるようになることや,山採りした植物を実際に植栽し,庭づくりをおこなっていきたいと考えている。

### 2.2 草刈りグループの創造

#### 2.2.1 背景と目的

草刈りは，農村の資源を管理していくうえでの基礎的かつ必要不可欠な作業である。草刈りの実施主体は，畦やため池の堤体，共有地などの実施場所によって異なるが,集落コミュニティで実施されるケースが多い。しかし，少子高齢化や集落機能の低下にともない,地域の草刈を継続して実施していくことが困難になっている。そこで、多様な立場の人々

**写真 2**　「草刈りフェス＠丹波篠山市」の様子

**写真 3**　農村での交流活動の様子

が参加する新しい草刈りグループが複数生まれやすい仕組みづくりをおこなっている。これまでに，都市部の住民が有償で草刈りサービスを提供するグループ（名称：播磨畦師（ハリマアゼシ））の創造などに取り組んできた[注1)]。新たに，大学生を主体とした草刈りグループの設立および持続的運営を目的にとして活動を進めてきた。

### 2.2.2 活動の内容と今後の課題

今年度は，草刈り体験の場を創造した。具体的には，草刈りを楽しむ，をコンセプトに「草刈りフェス」を丹波篠山市にて開催した。開催にあたっては，丹波篠山市で活動する地域組織，及び神戸大学のボランティアサークルと共同で企画・実施した。

今後，草刈りを体験する場を複数創造し，大学生を主体とした草刈りグループの創造に向けた取り組みをおこなっていきたい。

## 3. 交流活動

加古川市志方町や稲美町下草谷，市川町にてフィールドワークをおこなった。志方町や下草谷では，農業やため池，農地，水利施設などを管理していくうえでのリアルな課題・声を聞くフィールドワークをおこなった。市川町では，有機農業を核とした村づくりに関するヒアリングや有機農法について学機会を作った。

また，課題を聞くだけでなく，地域でおこなわれるイベントのサポートもおこなった。具体的には，志方東で開催されたコスモス祭り（日時：2022 年 10 月 15〜16 日，イベント参加人数：のべ 1,000 人，参加学生数：のべ 7 人）に参加し，会場設営やサツマイモ掘りのサポート，商品として出品する枝豆の選定などをおこなった。また，稲美町下草谷では，現地で栽培されている麦茶世用の麦（六畳大麦）を用いた麦茶づくりや，麦の茎を使ったヒンメリ（フィンランドの工芸品）づくりなどのワークショップをおこなった。

その他，環境人間学部オープンキャンパスや「アクリエひめじ」開館 1 周年記念イベントに参加し，里山資源を使ったキャンドルやヒンメリの作成ワークショップを開催し，学内外の交流および資源の活用につながる工夫をおこなった。

## 5. 今後の展望

各研究・実践活動は始動したばかりであり，各目的を達成するための課題は多くある。それらの課題を明確化するとともに一つずつ解決していくことが必要である。また，現メンバーは 1 回生のみとなっているが，学年を問わず，メンバーを募集していきたい。これらの活動が，学生にとってのコース選択やゼミ選択，さらには卒業論文のテーマ選定，キャリア選択において，有益な経験となるようにしていきたい。

### 注釈

注 1)「（一社）ため池みらい研究所」については，環境人間学部を深掘りした情報をタイムリーに発信する情報サイト「かんなび」を参照されたい。
https://shse-maga.com/study/913